第75回指定都市学校保健協議会報告

一般社団法人千葉市薬剤師会
学薬委員会
副委員長　田邑真弓

令和6年7月28日（日）9：00～16：30、第75回指定都市学校保健協議会　札幌大会が開催されました。全国各地より200名を超える参加者がありました。今回の協議主題は『社会の在り方が大きく変化するこれからの生活の中で児童生徒自らが健康を創りだす実践力を育む学校保健の推進』でした。

午前中の全体協議会では前回大会の福岡大会の報告と札幌大会の運営状況、そして次期開催都市を仙台市と決定しました。記念講演では、世界で活躍されているNPO日本ホスピタル・クラウン協会理事長　大棟耕介氏より、「笑いの力～ホスピタル・クラウンの現場から～」と題し、笑いで場の空気を変えることや入院中の子供たちに笑いを届ける活動について、素晴らしいパフォーマンスを交えた講演でした。

午後の分科会では、今回グラフィックレコーディングが取り入れられ、質疑応答の前に提言内容の確認が行われることにより、協議内容を深めることができました。

課題別協議主題

第1分科会【健康教育】「児童生徒が自らの健康に関心をもち、主体的に健康の保持増進に取り組む能力を育成する健康教育の在り方」

第2分科会【保健管理】「児童生徒の健康の保持増進を目的として学校・家庭・関係諸機関が連携を図った保健管理の在り方」

第3分科会【心の健康】「児童生徒の豊かな心を育てるための教育活動と支援の在り方」

第4分科会【地域保健】「健やかな児童生徒の育成を目的とした学校・家庭・地域の効果的な連携の在り方」

第一分科会について報告します。

【主旨】児童生徒が自らの健康に関心をもち、主体的に健康の保持増進に取り組む能力を育成する健康教育の在り方について協議する。

【協議の視点】○健康課題を解決するために主体的・実践的に取り組む力を育てる健康教育について ○学校・家庭・地域及び関係諸機関との連携による効果的な健康教育について

【指導助言者】北田雅子（札幌学院大学 人文学部子ども発達学科 教授）

【運営責任者】佐々木豊文（札幌市学校保健会 事務局次長）

【司会者】千葉剛禎（札幌市立学校 校長）

第1提言

浜松市中ノ町小学校 養護教諭 大石育与氏

「児童保健委員会の活動と教職員で連携して進める健康教育の実践～学校から家庭、コミュニティへの発信～」

児童の主体性を高める活動としては、保健委員を中心に「生き生きプロジェクト」を行い、校内けがマップの作製を通じて生徒の自主性を高める活動を行った。保健週間には、保健委員会お仕事体験ツアーを実施した。保健委員の仕事内容を児童に周知することで、保健委員が自分たちの仕事に自信をもって活動するようになった。連携を意識した健康教育とし、平成22年度から浜松市内東部の小中学校19校で始まった「こころの日」では「5（こ）＋5（こ）＋6（ろ）＝16」から、毎月16日ごろに、心の健康づくりについて教育課程に位置付け学校全体で取り組んでいる。6月のこころの日を「命について考える日」とし、いじめ対策コーディネーターと連携し命の大切さにつて学んでいる。保健主事との連携では

手形をプリントしたワークシートを利用し友人同士で長所を伝え合うホットハンドメッセージで自己有用感を高めた。毎年保健週間の最後に「家庭こころの日」に取り組み家族と連携している。学校が抱える健康課題には地域と連携して学校全体で取り組むことが大切である。

第 2 提言
静岡市静岡医師会 学校医園医委員会
大久保由美子氏
「学校健診を活用した受診勧奨 ～静岡市の取組について～」

2016 年 4 月学校保健安全法の一部改正について、児童生徒等の発達を評価する上で身長体重曲線を活用することが重要であると文部科学省より通達があり「成長曲線作成プログラム」が配布された。このプログラムについて、学校現場・養護教諭から、身長体重の入力が大変で手間がかかる、スクリーニングにより抽出頻度が高く判断が難しい。などから、学校医･園医委員会の健康管理プログラム委員会で、養護教諭が一目見てわかるスクリーニング基準、学校医が短時間で判断できる基準、できるだけコンパクトに！を目標に「静岡市プログラム」を考案した。「静岡市プログラム」を使用することにより抽出率が低下し、速やかに医療機関の受診に繋げることができる。十分な検討を重ねているので要望があればこのプログラムを提供し広めたい。

第 3 提言
大阪市立横堤小学校 養護教諭 米田美絵子氏
「生きる力を育む歯・口の健康づくり」～からだの元気は口から健康は健口から～

学校保健目標は「生涯にわたり、自律した健康づくりができる基礎の構築」である。口の中は健康状態や生活習慣が反映されやすい。口の中の健康を保つことが全身の健康に繋がることを児童に伝える必要がある。まずは、教員対象に学校歯科医による研修会を実施し、歯科健康診断結果を受けて個別歯磨き指導を行った。環境の違う交流校とオンライン保健交流会を行い、問題点を見出した。また、歯・口の予防のため体幹づくりが大切と考え、児童が自分自身で取り組める体幹トレーニング体操「神津体操」を実施した。ICT 機器の活用や地域の専門家や学校、幼稚園と連携して取り組むことによって学校全体で児童の歯科課題や対応策について考えることができた。

第 4 提言
千葉市立高洲中学校 養護教諭 板垣友香氏
「中学生のネット依存に関する効果的な予防教育を探る ～ネット依存レベルとセルフコントロール力の関連性から～」

中学生のネット依存者は 12 ～ 16% と言われている。研究 1 では「中学生のネット利用状況と学校生活に関する調査」を実施したところ「高リスク使用者」が 1.0%「潜在的リスク使用者」が 33.1%、「一般使用者」が 64.4% であった。依存レベルが上がるほど利用が長時間の傾向にあった。「リスク使用者」は「一般使用者」に比べ、セルフコントロール力が弱かった。いかに使用時間をコントロールし、決められた時間を守ることができるかがネット依存を予防するポイントの一つになると考えた。研究 2 では、研究 1 の結果をもとに、予防教育「ちばっこアウトメディアプロジェクト！」を実施した。タブレットを使用しネット依存について、ストレス対処法について、脳の働きについてなどの 1 本 15 ～ 20 秒の動画（養護教諭部会で取りまとめたもの）を視聴するチャレンジを自分で選んで繰り返し実践し結果を得るものである。これにより、依存レベルに改善が見られた。予防教育に求められるのは、ネット依存をただ制限するのではなくネット利用に関する正しい知識と自らの行動をコントロールできる能力の育成であり、ネットと上手に付き合うことのできる子供を育てることだと考える。やり方は各校に任せて行った。大人の力を借りた場合より、自分で決めた場合の方が達成率は高かった。

第 5 提言

仙台市立桂小学校 養護教諭 草木早紀氏

「成長・命の大切さを伝える保健教育 ～震災後の心と体のケアの取組～」

東日本大震災の被災校である仙台市立岡田小学校に震災の 4 年後に赴任した。被害の大きかった地域の小学校では、平成 23 年より児童と保護者を対象に「心とからだの健康調査」（仙台市教育局教育相談課）を実施していた。普段は元気に見える児童も悩みや様々な感情を抱え、心身に影響を及ぼしていることが分かった。保護者の調査でも不安が強い様子だった。児童の強い不安感、PTSD 等の予防や早期発見のため、精神科医派遣事業があり教職員の「心のケア研修」が行われ、ハイリスク児童の理解やかかわり方を学んだ。助産師を招いて、「いのちの授業」を担任、栄養教師と行った。成長記録の確認は、津波で母子手帳や写真などを失っている児童もいるため配慮しながら実施した。「睡眠カード」を作製し、睡眠の大切さや役割を伝えた。現在の児童は震災後に生まれているが保護者の経験の影響が感じられる時がある。